

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

12月4日、なら100年会館(奈良市)で、「第64回近畿・東海・北陸ブロック民俗芸能大会奈良県大会」が開催された。大会は昭和34(1959)年から始まり、12府県に伝わる民俗芸能を一堂に集めて、順繕りに開催地を交代して開かれてきた。後に6府県による隔年出演となつたが、奈良県では、ほぼ12年に一度開かれている。

正午過ぎ、舞台下手花道で、奈良市都祁吐山町の「辻太鼓」が始まった。1台の鉦打ち胴長太鼓を2人が調子を変えて打つもので、各地の芸能を呼び寄せる趣向だ。

最初の演目は、都祁白石町にある興善寺鉦講の「双盤念仏」。十夜法要の結願などに行われ、木枠に吊り下げる直径40cmほどの鉦を二つ据えて講員が打ちながら、声を引いて独特の調子で念仏を唱

える。華やかでかつ莊重な念仏だった。かつて夜遅くこの念仏を聞いて、仏はかつて生駒方面でも運びこなすと聞いて、終了後に小豆粥を頂いたことを思い出す。双盤念仏は、奈良市内の中融寺でも「サンハライ念佛」の名で時折行われる。

次は富山市熊野神社の稚兒舞。子供2人が「ジジ面」と「ババ面」を着けて軽く跳ぶように「大奈曾利の舞」を演じた。地方に伝播した舞樂を子供に演じさせたもので、不思議な愛らしさが漂う。

石川県の「二俣いやさか踊り」と岐阜県の「高山おどり」はともに盆踊りで、いやさか踊りは鈴の音とともに歌が歌われ、男女が太刀や扇や傘などを手に踊る。高山の踊りは途中手をつなぐ所

が、軽快なお囃子が響くなか、ゆつくりと天を望み、地を這うような所作を繰り返す。抑制した動作が、かえって獅子の存在感を強めていた。

京都府からは一人遣いの「和知人形淨瑠璃」。村方騒動で獄死した夫の元へ走る妻子を描いた新作人情話で、語りと人形遣いの妙技によって、理不尽な世の中に生きる共感が観客を捉えていたよう

に思つ。京都府からはさうに奈良市都祁吐山町の勇壮な太鼓踊りが出演。雨乞いの願満に踊られた吐山の太鼓踊りは、地元では七つの垣内から1組ずつが出演。車付きの大太鼓を左右に身を翻しながら打つ。赤いシテ振りは太鼓

が、軽快なお囃子が響くなか、ゆつくりと天を望み、地を這うような所作が、かえって獅子の存在感を強めていた。

京都府からは一人遣いの「和知人形淨瑠璃」。村方騒動で獄死した夫の元へ走る妻子を描いた新作人情話で、語りと人形遣いの妙技によって、理不尽な世の中に生きる共感が観客を捉えていたよう

に思つ。京都府からはさうに奈良市都祁吐山町の勇壮な太鼓踊りが出演。雨乞いの願満に踊られた吐山の太鼓踊りは、地元では七つの垣内から1組ずつが出演。車付きの大太鼓を左右に身を翻しながら打つ。赤いシテ振りは太鼓

が、軽快なお囃子が響くなか、ゆつくりと天を望み、地を這うような所作が、かえって獅子の存在感を強めていた。

民俗芸能の特別公開



吐山の太鼓踊り—奈良市で2022年12月4日、筆者撮影